

## クトゥブッディーン・シーラーズィー自伝

### 『医学典範注釈』序文翻訳

#### Autobiography of Quṭb al-Dīn al-Shīrāzī:

#### Translation of the Preface to *Commentary on the Canon of Medicine*

矢口直英

Naohide YAGUCHI

### I. はじめに

イスラームの医学は、ギリシア医学の遺産を保管し、それをラテン語圏に受け渡す媒介として機能した。古い医学史はイスラーム圏の医者たちの名前を幾つか挙げ、アブー・バクル・ラーズィー (Abū Bakr al-Rāzī, 925 年没) やイブン・スィーナ (Ibn Sīnā, 1037 年没) に頁を割くものの、12 世紀以後の医学については触れないか、医学の衰退として簡単に言及するのみである<sup>(1)</sup>。あるいは、ガザーリーによる哲学批判がイスラームにおいて科学全般への反感を生み出し、医学を含む科学は停滞したと言われることがある<sup>(2)</sup>。

これと並んで、遅い時代の医学が十分に顧みられない事情がある。それは、イブン・スィーナがイスラームにおける医学の頂点と評されることである。それ以後の医学者たちは彼の名著『医学典範』(*al-Qānūn fī al-ṭibb*) への注釈を著すことに集中したと言われる。注釈文献に高い価値を認めない研究者は多く、その評価に従えば、イブン・スィーナ以後の医学はその再生産でしかない<sup>(3)</sup>。

確かに文献目録の上では多くの医学書が『医学典範注釈』としてまとめられるが、かつてガレノスがヒポクラテス著作への注釈という形で自身の見解を展開してその権威付けを行ったように、注釈書が原典の焼き直しであるとは限らない。このことは、イブン・ナフィース (Ibn al-Nafīs, 1288 年没) が血液の小循環を新たに指摘したのがまさに『医学典範解剖学注釈』においてであったことから明らかである<sup>(4)</sup>。新たに執筆される文献の多くが注釈の形をとるようになり、完全に独立した著作は目立たなくなっていくが、そこで生み出された注釈文献が単なる原典の

<sup>(1)</sup> 例えば, A. Castiglioni, *A History of Medicine*, trans. E. B. Krumbhaar, 2nd edn., New York: Alfred A. Knopf, 1958, 276–282.

<sup>(2)</sup> Cf. G. Saliba, *Islamic Science and the Making of the European Renaissance*, Cambridge, MA: MIT Press, 2007, 1–3.

<sup>(3)</sup> Cf. Saliba, *Islamic Science*, 241.

<sup>(4)</sup> M. el-Tatawi, “Der Lungenkreislauf nach el-Koraschi. Wörtlich übersetzt nach seinem ‘Kommentar zum Teschrih Avicenna’,” M.D. dissertation, Albert-Ludwige Universität zu Freiburg, 1924; M. Meyerhof, “Ibn an-Nafīs and his Theory of the Lesser Circulation,” *Isis* 23 (1935), 100–120; N. Fancy, *Science and Religion in the Mamluk Egypt: Ibn al-Nafīs, Pulmonary Transit and Bodily Resurrection*, London: Routledge, 2013.

解説書でなかったことは、他の分野でも同様に指摘されている<sup>(5)</sup>。

しかしながら、13世紀のイブン・ナフィースの発見が16世紀のヨーロッパの医者たち（セルヴェ、バルベルデ、コロombo）に先立つことが「発見」されてから100年近くが経つにもかかわらず、イブン・スィーナー以後のイスラーム医学の進歩に関して言及される事例はこれを含む数点に過ぎない<sup>(6)</sup>。これは、数多くの『医学典範注釈』を含め、遅い時代の医学文献の大半が未研究であるという事情による。11世紀を境にして、イスラーム医学の展開は見通しが悪くなる。

本稿は、『医学典範注釈』のうち広く普及した1点<sup>(7)</sup>、クトゥブッディーン・シーラーズィーによる注釈の序文の翻訳である。この序文には簡潔ながら、著者の自伝が含まれている。それ以外にも、彼が注釈執筆の際に参照した文献が挙げられており、執筆当時（13世紀末から14世紀初頭）における医学研究の状況を垣間見ることができる。これらの情報は些細なものではあるが、イブン・スィーナー以降の医学の状況を理解するために役立つであろう。

## II. シーラーズィー『サアドへの献呈書』

ムハンマド・イブン・マスウード・クトゥブッディーン・シーラーズィー (Muḥammad ibn Mas‘ūd Qutb al-Dīn al-Shīrāzī, 1236–1311年) はスンナ派の碩学であり、医学、天文学、数学、哲学、神学、クルアーン注釈など多岐の分野に著作がある<sup>(8)</sup>。彼の照明哲学、および天文学がシーラーズィー研究の中心となっている<sup>(9)</sup>。後者は特に重要で、彼はイル・ハーン朝下のマラーガの観測所で働いていたと思われるが、イル・ハーン星表 (*Zīj-i Ilkhānī*) の作成に関わっていたか否かについては結論が出ていない<sup>(10)</sup>。

シーラーズィーの人物像については、同時代の人名録や史書の証言から比較的多くのことが分かっている<sup>(11)</sup>。その典拠として重要なものの1つが、シーラーズィーが『医学典範注釈』序文

<sup>(5)</sup> 注釈文献に着目した研究は、特に天文学や哲学の分野で進んでいる。Cf. Saliba, *Islamic Science*, 239–243; A. Shihadeh, *Doubts on Avicenna: A Study and Edition of Sharaf al-Dīn al-Mas‘ūdī’s Commentary on the Ishārāt*, Leiden: Brill, 2016, 47–49; Kh. el-Rouayheb, “Arabic Logic after Avicenna,” in C. D. Novaes and S. Read (eds.), *The Cambridge Companion to Medieval Logic*, Cambridge: Cambridge University Press, 2016, 84.

<sup>(6)</sup> イブン・ナフィースの他に、アブドゥッラティーフ・バグダーディー (‘Abd al-Laṭīf al-Baḡhdādī, 1231年没) による下顎骨に関する発見が言及される程度である。例えば、Saliba, *Islamic Science*, 128f.を参照。

<sup>(7)</sup> *GAL* ², I, 597; *GALS*, I, 824; Anawati, 205 (no. 3).

<sup>(8)</sup> Cf. J. Walbridge, *The Science of Mystic Lights: Qutb al-Dīn Shīrāzī and the Illuminationist Tradition in Islamic Philosophy*, Cambridge, MA: Distributed for the Center for Middle Eastern Studies of Harvard University by Harvard University, 1992, 175–191。またこれら以外の基礎情報については、M. Mīnūvī, “Mullā Qutb Shīrāzī,” in *Yād-nāmah-i Īrānī-i Mīnūrskī*, Tehran: Intishārāt-i Dānishgāh-i Tīhrān, 1969, 165–205; E. Wiedemann, “Qutb al-Dīn Shīrāzī,” *Encyclopaedia of Islam: New Edition*, eds. H. A. R. Gibb et al., Leiden: E. J. Brill, 1986, vol. 5, 547f.; S. ‘A. Anwār, “Qutb-al-Dīn Shīrāzī,” *Encyclopaedia Iranica*, online edition, 2005, available at <http://www.iranicaonline.org/articles/qutb-al-din-sirazi> [2018年2月28日閲覧]を参照。

<sup>(9)</sup> 前者はWalbridge, *The Science of Mystic Lights*, 後者はK. Niazi, *Qutb al-Dīn Shīrāzī and the Configuration of the Heavens: A Comparison of Texts and Models*, Dordrecht: Springer, 2014が代表的である。

<sup>(10)</sup> この点については、いずれどこかで述べる予定である。

<sup>(11)</sup> 他の史料に見られるシーラーズィーの経歴については、Niazi, *Qutb al-Dīn Shīrāzī*, 61–84が詳細な情報をまとめている。

に残した自伝である。この自伝は彼の経歴の典拠として度々参照されてきたが、『医学典範注釈』の本文はもとより、その自伝を含む序文ですら信頼できる校訂が未だに出版されておらず<sup>(12)</sup>、研究が進んでいない。このような研究状況において、本稿がこの序文の邦訳を提供することには大きな意義がある。13世紀イル・ハーン朝下で活躍した学者の1人であるシーラーズィーのこの自伝は、彼自身を対象とする研究のみならず、彼と共働した学者たちの研究にも一定の貢献をすのであろう。また後述するように、この序文からは自伝以外にも有意義な情報を読み取ることができる。

シーラーズィーの注釈は単純に『医学典範注釈』（*Sharḥ al-Qānūn*）と呼ばれることもあるが、著者自身はその序文で『サアドへの献呈書』（*al-Tuḥfa al-Sa‘dīya*）あるいは『賢者たちの公園、医者たちの庭園』（*Nuzhat al-hukamā’ wa-rawḍat al-aṭibbā’*）という題名を挙げている。題名にある通り、この書はサアドッディーン・ムハンマド・サーワジ（Sa‘d al-Dīn Muḥammad Sāwajī, 1311/12年没、ガーザーン・ハーン臣下の役人 [Ṣāhib al-Dīwān]）<sup>(13)</sup>へ献呈されたものである。この注釈書が原典の全体を網羅しているとする研究もあるが、写本を検討した限り、『医学典範』総論（*kulliyāt al-Qānūn*）＝『医学典範』第1巻のみを対象としたものようである（したがって、『医学典範総論注釈』（*Sharḥ Kulliyāt al-Qānūn*）と記録されることもある）。

シーラーズィーはこの注釈の序文で、自伝以外にも、医学という学問の価値の高さを語っている。この議論はシーラーズィーが医療倫理書『医学と医者が必要であることの証明、彼らの作法と教訓』（*Bayān al-ḥāja ilā al-ṭibb wa-l-aṭibbā’ wa-ādāb-hum wa-waṣāyā-hum*, 以下『証明』）で展開するものと同様であり、アクル（‘aql）とナクル（naql）、つまり（ギリシア）哲学的な理性的学問論と、イスラームの伝統（クルアーンやハディース）の両方に依拠している<sup>(14)</sup>。『証明』と比べて非常に簡潔であり、医学書の序文に相応しいトポス（*topos*）でしかない可能性もあるが、彼自身が第一に医者として働いていたこと、そのことを主張するための単著が編まれたことを考えると、単なる定型的議論とは言い切れないだろう。

シーラーズィーはこの序文で、自身の注釈を執筆する際に参照した他の『医学典範』注釈書やその他の医学書について、こと細かに言及している。これらの著作の中には（判明している限りで）現存しないものも含まれる。『証明』でも本注釈でも、シーラーズィーは他の資料から引用を行う際に長大な文章を書き写すことがある<sup>(15)</sup>。そのため、本翻訳では扱わないが、失われた文

<sup>(12)</sup> Shīrāzī, *Durrat*, 38–42 (n2) はこの自伝の翻刻を収録しているが、伝記的情報に関する部分のみが翻刻されている。後述するように、省略された箇所にはシーラーズィーの医学観や注釈執筆時の資料が語られている。

<sup>(13)</sup> Walbridge, *The Science of Mystic Lights*, 186 (no. 29). 今回参照した写本では、いずれも「サーウィー」（Sawī）と記されている。

<sup>(14)</sup> 詳細は、矢口直英「14世紀イスラームの医学観：『医学と医者が必要であることの証明』翻訳(1)』『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』49（2018）、235–249；矢口直英「13世紀イスラームの医学擁護：クトゥブッディーン・シーラーズィーの伝統的議論』『科学史研究』57巻（2019）、250–265参照。

<sup>(15)</sup> 例えば、『証明』における11世紀のサーイド・イブン・ハサン（Ṣā‘id ibn al-Ḥasan）による医療倫理書『医学への欲求の喚起』（*Tashwīq al-ṭibbī*, 1072年執筆）からの引用は、2003年のペイルート版で8頁にわたるもので、原典の複数の章にまたがっている（Shīrāzī, *Bayān*, 35–42）。『医学典範注

献の断片が本注釈に保存されていることが期待できよう。

今回の翻訳で参照した写本は、以下の通りである<sup>(16)</sup>。

- Berlin, Staatsbibliothek zu Berlin, MS Or. 3039.
- Istanbul, Ayasofya, MS 3649.
- London, SOAS University of London, MS 371.
- Tehran, Kitābkhānah-i Majlis-i Shūrā-yi Islāmī, MS 1177 (727/1327 年書写).
- Tehran, Kitābkhānah-i Malik, MS 4294 (725/1325 年書写).

翻訳では、インターネット上で参照できるベルリン写本<sup>(17)</sup>の位置を示した。

大部な著作であるにもかかわらず、本注釈の現存する写本が非常に多いこと、書写年代が著者の執筆時期と比べて早いことは、序文で著者が語る本注釈の人気を裏付けていると言えよう。

また翻訳で参照する文献として、以下のものを挙げる。

Anawati, G. C. 1950: *Essai de bibliographie Avicennienne*, Cairo: Edition al-Maaref.

GAL<sup>2</sup> = Brockelmann, C. 1943–49: *Geschichte der arabischen Litteratur: Zweite den Supplementbänden angepasste Auflage*, 2vols., Leiden: E. J. Brill.

GALS = Brockelmann, C. 1937–42: *Geschichte der arabischen Litteratur: Supplementbänden*, 3vols., Leiden: E. J. Brill.

Sezgin, F. 1970: *Geschichte des arabischen Schrifttums. Band III: Medizin-Pharmazie, Zoologie-Tierheilkunde bis c. 430 H.*, Leiden: E. J. Brill.

Shīrāzī, Qutb al-Dīn al- 2003: *Bayān al-hāja ilā al-tibb wa-l-aṭibbā' wa-ādāb-hum wa-waṣāyā-hum*, ed. A. F. al-Mazīdī, Beirut: Dār al-Kutub al-‘Ilmīya.

Shīrāzī, Qutb al-Dīn al- 1385 [2006/7]: *Durrat al-tāj*, ed. M. Mishkāh, Tehran: Intishārāt-i Hikmat.

Spink, M. S. and G. L. Lewis 1973: *Albucasis: On Surgery and Instruments*, Berkeley: University of California Press.

Ullmann, M. 1970: *Die Medizin im Islam*, Leiden: E. J. Brill.

クルアーン章句の翻訳については、特に注記のない限り、井筒俊彦訳（岩波文庫版）を参照する。ハディースについては、今回はその真偽を重要な問題とせず、スンナ派「六書」にのみ照合した。シーラーズィーが挙げる人名とその著作に関する情報については、煩雑になるため、該当著作に関するもののみを挙げる。今回翻訳した箇所は自伝を含むが、著作の序文なので献辞の占める割合が大きい。この序文でシーラーズィーは修辞技法、特に対句法（parallelism）を多用した文章を綴っており、語彙選択に必ずしも一貫した基準があるわけではないと思われる。そのため、本翻訳では原語と訳語の一対一対応にこだわらない。

---

積』でも同様に、他の文献から長大な引用がしばしば見られる。

<sup>(16)</sup> これらの写本データの一部は、三村太郎氏、俵章浩氏から提供していただいた。ここに感謝を述べる。なお、M. Dirāyatī (ed.), *Fihristvārah-i dastnūvishtā-yi Īrān*, Tehran: Kitābkhānah, Mūzah va Markaz-i Asnād-i Majlis-i Shūrā-yi Islāmī, 1389 [2010], vol. 6, 905–907 には、他にも多数の写本が記載されている。

<sup>(17)</sup> <http://resolver.staatsbibliothek-berlin.de/SBB0001577000000000> [2018年2月28日閲覧]。

### III. 翻訳

2v 講話の始まりに最も適当なもの、書物の始まりに最も適切なものは、神を讃えることである。[神は]魂の生と身体与健康を与えてくださる御方、困難な疾患と病氣から救ってくださる御方、健康を保護して害を治す力を人類 (warā) の内に組み込むことで治癒してくださる御方、医療の技術と治療の方策を [それらに] 最も相応しい知性をもつ者や理解力をもつ者たちに理解させることに長ける御方である。そして、使徒の封印であり、人類の主人であるムハンマドやその家族へ、敬虔で高貴な彼の家族と友人たちへ、祝福あれ。雲が拡がり、鳩が騒ぐ限りは。

[神を] 讃えるときは献身的に讃えよ。その栄光の傘のもとで満足せず、その高原の頂の下で止まることのないように。夜明けが明るく輝き、鳥が歌って叫ぶ限りは。病氣や不調の際に [他者に] 相談して、処方や治療を許可したムハンマドを、また健全を推し進め寿福を訴えた彼の家族や教友たちを祝福せよ。鶏が叫び声を上げ、神が朝日を昇らせる限りは。

さて、神の被造物たちに最も必要とされているマフムード・イブン・マスウード・シーラーズィー (Maḥmūd ibn Mas‘ūd al-Shīrāzī) ——神が彼に善き終わりを定めてくださいますように——は言う。恩恵の水場のうち最も甘いもの、知恵の草地のうち最も肥沃なもの、高貴さの牧場のうち最も広大なもの、言葉の選集に込められた最も貴重な宝石は、永遠なる神かけて、偉大な構築物であり巨大な事業である。それゆえ、それを顕わにされた者が最も遠い目標へ達し、極めて高い頂へ登りつめ、最も遠い極みや最も高く輝ける場所を認識することができる知識というのは、神的なもの (ulūhiya) の偉大な属性の1つであり、主に属するもの (rubūbiya) に特有の特徴の1つである。それは人間にとって最も優れた宝物であり、最も完璧な利益であり完成である。どうして、そうでないことがあるのか。

学問の優越点の中に、その徒の美德の中に、正確な徴 (āyāt), よく知られた報告 (akhbār), 言い伝えられた痕跡 (āthār) が現れている。例えば、[神の] 言葉「言ってやるがよい、『ものの分かった人間と、わけのわからぬ人間とが同等かね』と」<sup>(18)</sup>、「特別の聖智を授けられた者を何段も高い地位に [引き上げて下さろう]」<sup>(19)</sup>や、[預言者ムハンマドの] 言葉「知者は啓示を受けない預言者である」<sup>(20)</sup>、「我が共同体の知者たちは、イスラエルの子らの預言者のごとき者である」<sup>(21)</sup>である。それは数えきれないほどに多く、隠しきれないほどに明らかである。

私は若いころから老いるまで、学問を探求すること、その徒と同席すること、そして時宜の助けと可能性に沿って彼らを模倣することに躍起になっていた。それは、[神が] 私に [学問を] 好ましくて下さったという、神の私への恩寵と親切の一部である。私[自身] 最善を尽くしたが、私が成功を収めた様々な種々のものを獲得する中での成功を授けて下さったのは神であった。それはついに、隠されたものを知り、見えざるものを認識し、今の時代はおろか、アーダム [の

<sup>(18)</sup> クルアーン第 39 章第 9 節。

<sup>(19)</sup> クルアーン第 58 章第 11 節。

<sup>(20)</sup> 「六書」には見つからない。

<sup>(21)</sup> 「六書」には見つからない。

3r 時代] から今に至るまで誰一人にも解決できなかったものを解決できるほどの力になった。私は探求の仕事や願望の追求に努め続けてきたので、全ての人々から、私の同僚たちに類するほどの視線を集めることとなった——私が同輩たちより優れていると言うつもりはないが——。神がお与えになる恩寵や御力について、神に讃えあれ。

学問の高貴さはそれによって証明されるものとその階級とに応じて異なるものであり、それによって獲得されるものの偉大さに応じて偉大になり、その学問の確実さはその論証の確実さに応じて増す。それゆえ、[学問のうち] 最もその対象が高貴で、その利益が大きく、その証明が明白なものは、最もその位が高く、目的が最も有益で、構造が最も確実で、証明が最も正しいものである。それは医学 (‘ilm al-ṭibb) <sup>(22)</sup>である。というのも、その対象が人間の身体という、元素の生成物のうち最も高貴なものであり、それによって獲得できるものは、あらゆる時宜、時、地域、場所において人間が共通して必要とするものだからである。その証明の正しさについては、[さらなる] 証明を必要としないほどに明らかである。というのも、この学問の根本の一部は感覚 (ḥiss) と実体験 (‘iyān) によって、一部は明確な判断 (jazm) と論証 (burhān) によって確かめられるからである<sup>(23)</sup>。

このため、医術 (ṣinā‘at al-ṭibb) の優越、その偉大さ、その地位と位階の高さについて諸共同体 (umam) や諸宗教 (diyānāt) は同意し、正しく有効な類推や継続された適切な経験を伴って、言説 (kalim) や証言 (shahādāt) が一致している。これに関して、それらの相違にもかかわらず諸聖法 (sharā‘i) や諸王朝 (duwal) が、それらの差異や一致にもかかわらず諸宗派 (milal) や諸教派 (niḥal) が、証言している。また預言者たち (anbiyā’) や後継者たち (awṣiyā’) も [医学を] 利用し、敬虔な人々 (atqiyā’) や賢人たち (awliyā’) が彼らを模倣している。

それらについて [預言者は] 言った。「学問には2つあり、身体の学問と信仰の学問である」<sup>(24)</sup>。そこで、身体の学問から始めよ。というのも、信仰は身体が健康でなければ成立しないからである。ここから、ある正しい先人が言った。「学問には2つあり、自然の学問と聖法の学問である」。また [預言者は] 言った。「両者が健康になることはない。健人は自制した者 (muḥtamī) であり、病人は自堕落な者 (mukhallat) である」<sup>(25)</sup>。そのため、賢者たちは「健康な時の『タフリート』 (takhliṭ) は、病気の時の治療に等しい」と言った。[ここで「タフリート」の意図するところは、同時に適していることはあり得ないからという [理由で]、一度の食事で同時に食べ

<sup>(22)</sup> 「医学」 (‘ilm al-ṭibb) は学問 (ἐπιστήμη/scientia)、下で言及される「医術」 (ṣinā‘at al-ṭibb) は技術 (τέχνη/arts) という区別がある。前者の場合は医学の普遍的原理に、後者の場合はそれらを活用した実践に焦点が当てられている。なお、厳密に言えばアラビア語の「ṭibb」は「医」と訳すべきだが、日本語の慣例として適当ではないので、「ṭibb」も「医学」と訳す。

<sup>(23)</sup> 医学が優れていることに関して、同内容だが、より詳細な議論が『証明』でもなされている。Shīrāzī, *Bayān*, 10–12.

<sup>(24)</sup> 「六書」には見つからない。アブー・ヌアイム (Abū Nu‘aym al-Iṣfahānī, 1038年没) はシャーフイー (al-Shāfi‘ī, 820年没) に由来する伝承として、これを挙げる。Abū Nu‘aym, *Ḥīlat al-awliyā’ wa-ṭabaqāt al-aṣfiyā’*, Cairo: Dār al-Fikr, 1996, vol. 9, 142. Cf. F. Rosenthal, *Das Fortleben der Antike im Islam*, Zürich: Artemis, 1965, 97 (*The Classical Heritage in Islam*, E. and J. Marmorstein [trans.], Berkeley: University of California Press, 1975, 67).

<sup>(25)</sup> 「六書」には見つからない。

ることが許されない2つの相反するものを合わせてしまうことではない<sup>(26)</sup>。また「預言者は」言った。「治療しなさい。神が癒しを作り出されることなく病を作り出されることはない。ただ1つ、老衰 (haram) を除いて」<sup>(27)</sup>。また「預言者は」言った。「最良の人は、人々に役立つ者である」<sup>(28)</sup>。特定の人々にのみ役立つのではなく、全ての宗派・宗教の様々な人々を包括して、その利益が彼ら「自身」の魂、精神、身体、彼らの同類に向かうような者は、なんと役立つことであろうか。

イブン・クタイバ (Ibn Qutayba, 889年没) が彼自身のイスナードで伝える。「ある預言者が神に対して虚弱を訴えた。すると神は、肉をミルクで煮て食べるよう宣告した。というのも、それらの中に力が含まれているからである」<sup>(29)</sup>。いと高き神が人間を、肉とミルク以外で強めることが可能であることは周知の通りである。しかしある秘密のために、「神は」叡智における御力をお隠しになられた。その「秘密が」明かされてしまうと、たとえ「御力に」関係あるとしても「御力自体が」嫌悪される「結果が」導かれるためである。なぜなら「その秘密は」、主に属する秘密、神的な幽玄の鍵の1つだからである。このためモーセ——彼に平穏あれ——は、薬品を摂取した者に反対したときに「神に」非難されて、「お前は私への信頼によって、我が叡智を無下にするのか」と言われた。

3v 神が預言者たちに命じた技術の優越点や、その技術を行う上で神を模倣する技術者については、これで十分であろう。そして「医学は」、都市において、また人間という種の存続において、あらゆる時あらゆる場所で必要な学問のうちで最も高貴な、統治の学問 ('ulūm siyāsīya) の一団に含まれる。これは、卓越した都市が公正な支配者、学識ある医者、流れる河川、開かれた市場を必要とするからである。これらの諸属性を完璧に「備えた」都市、例えばタブリーズに祝福あれ。そこは楽園の中の楽園であり、魂が希求するもの、目を楽しませるものがそこにはあり、もしそれが完璧であれば「都市として」完璧であったのになどと言われるようなものは「一切欠けてい」ない。

この技術は知性ある者たちの本性 (tabā'ī) に据え付けられ、優博な人々の素質 (gharā'iz) に刻印されている。彼らがその原理について述べ、その利益を詳細に説明して、清らかな理性をもつ人々がそれらを類推によって導出し、明晰な才をもっている人々が経験によってそれらを修正した。

これについて、先人のうち知性ある人々の一部は言った。「病が「介入し得ない完璧な」治療

<sup>(26)</sup> 上で「自墮落」と訳したアラビア語「mukhallat」(分詞形)の動名詞形が「takhlīt」であり、この単語は「混ぜる」、「混乱させる」という意味も有する。しかし前述の言葉では、合わない食べ物を混ぜるという意味で言われているわけではない、ということである。

<sup>(27)</sup> このハディースは真正とされる。Abū Dā'ūd, *Sunan*, bk. 29, no. 1; al-Tirmidhī, *Jāmi'*, bk. 28, 2172; Ibn Māja, *Sunan*, bk. 31, 3562. なお、『証明』でもこれと類似するハディースは挙げられているが、細部が異なる。著者は「老衰」(haram)ではなく「疲弊」(sa'm)と言い、さらに後者を「死」(mawt)と説明している。Shīrāzī, *Bayān*, 14. これ以外のハディースは『証明』で挙がるものと重ならない。

<sup>(28)</sup> 「六書」には見つからない。Cf. al-Muttaqī al-Hindī, *Kanz al-'ummāl fī sunan al-aqwāl wa-l-af'āl*, ed. Ş. Saqqā and B. Ḥayyānī, Beirut: Mu'assasat al-Risāla, 1985, vol. 16, 127 (no. 44154).

<sup>(29)</sup> Ibn Qutayba, *Kitāb 'Uyūn al-akhbār*, Beirut: Dār al-Kutub al-'Arabī, 1925, vol. 3, 208.

は、食欲のあるうちに食卓に着き、食欲のあるうちに食卓を立つことである」。また別の人は言った。「病に苦しむとき、急ぐべきは治療である」。またマアムーン (al-Ma'mūn, アッバース朝第7代カリフ、在位 813–833 年) は言った。「兄弟には3つの層がある。1つは栄養に当たる層で、欠くことができない。1つは薬に当たる層で、時として必要となる。1つは毒に当たる層で、必要ではなく、むしろ避けるべきものである」。またある雄弁な者は言った。「発熱には避難所となるものは無い」。また別の人は言った。「病人が食欲を抱くとき、彼は回復という閃光を見て、快方という香りを嗅ぐ」。このため、あるカリフがその家臣の父を訪ねて、「何が欲しいか」と尋ねたとき、その人は「食欲が出て欲しいのです」と答えたのである。これは、ヒポクラテス (Buqrāt) が語った通りである。「あらゆる病気において、正常な理性は良い徴候であり、食べ物への喜びも同様である」<sup>(30)</sup>。

主旨は次の通りである。この技術は人間の天分 (fiṭra) に刻印されている。それどころか、動物の本性にもそうになっている。ただし、人間はそれを本性 (ṭabʿ) と学習 (ta'allum) によって用いるが、動物は追従 (ṭabaʿ) と霊示 (ilhām) によって用いる。

この技術が諸技術の内でもつ階梯は我々が述べた通りのものであり、私はこの技術で有名な家の一員であった<sup>(31)</sup>——たしかに彼らは、イエスの息 (anfās 'isawīya) とモーセの手 (aydin mūsawīya) を備え、彼らが治療や混質の矯正に長けていたので、この贈り物のうち最も高貴なものを有していた——。そのため、私は青年として精力ある時期、若かった年頃に、その[技術を]獲得してその全体と細部を捉えようと努めた。私はハチミツを目に塗って睡眠を遠ざけ、有名な要約書を記憶し、それら[の内容]を確信し、流行の治療を目の当たりにして確かめ、医学や眼科学 (kuḥl) に関係する全ての手技、例えば瀉血 (faṣd)<sup>(32)</sup>、[血管の]引き抜き (sall)<sup>(33)</sup>、[眼瞼]形成術 (tashmīr)<sup>(34)</sup>、反転 (taqlīb)、翼状片の回収 (laḡṭ al-zafara)<sup>(35)</sup>、角膜パンヌス (sabal) [の治療]<sup>(36)</sup>などを、ただし発穿術 (qadh)<sup>(37)</sup>を除いて体験した。

しかしこれらの全ては、我が父であり、熱心な導師、ディヤーウッディーン・マスウード・イブン・ムスリフ・カーザルーニー (Ḍiyā' al-Dīn Mas'ūd ibn al-Muṣliḥ al-Kāzarūnī) ——神が彼を赦して護り、その楽園の最も高い居室に据えてくださいますように。彼の同僚たちが合意するところでは、彼はその時代におけるヒポクラテス、その世代におけるガレノス (Jālīnūs) であった<sup>(38)</sup>——のもとでは上手く行かなかった。私が適当な治療や混質の変換についての適切な推理や鋭い

<sup>(30)</sup> 『箴言』第2章第33条 (Littré, IV, 480f.; J. Tytler [ed.], *The Aphorisms of Hippocrates translated into Arabic*, Calcutta: Committee of Public Instruction, 1832, 15)。

<sup>(31)</sup> この後半(「私は〜」)から、Mishkāh 版に翻刻あり。Shūrāzī, *Durrat*, 38。

<sup>(32)</sup> 以下の語句の羅列は医学や眼科学の手技の具体例だと思われるが、大半が現在のアラビア語やペルシア語の辞書には見つからないようである。これらの解釈はザフラーウィーの外科学文献に依拠した。Spink and Lewis, 624–655。

<sup>(33)</sup> Spink and Lewis, 178–183, 600–603。

<sup>(34)</sup> Spink and Lewis, 212–219。

<sup>(35)</sup> Spink and Lewis, 230–233。

<sup>(36)</sup> Spink and Lewis, 236–241. Cf. H. Abd-ool Mujeed (ed.), *The Buhr-ool Juwāhir: A Medical Dictionary by Mohammad Bin Yōsoof, The Physician of Herat*, Hildesheim: Georg Olms, 2005, 153b。

<sup>(37)</sup> Spink and Lewis, 252–257。

<sup>(38)</sup> Cf. Ullmann, 163。

見識によって名を挙げたので、我が父の死後、人々は私をシーラーズにあるムザッファリー病院 (al-Māristān al-Muẓaffarī) の医者 (ṭabīb) と眼科医 (kaḥḥāl) <sup>(39)</sup> に任じた。[このとき] 私は 14 歳の未熟者であった。私はそれから 10 年間、治療をするためでなければ書物を開かず、証明をするためでなければ考察もしない医者たちの 1 人であり続けた。我が魂は、同時代の人々が満足していることで、つまり彼らが稼ぎを得て一般人たちの [関心を] 欲する程度で、この技術の学習に満足してしまっていたことを [否定して] 拒絶した。そうではなく、私とその技術において最遠の極み、最高の位に達するように仕向けたのである。

4r 私が『医学典範』総論 (kulliyāt al-Qānūn) に着手したのは、我が叔父であり、賢者たちの王、優博な人々に模倣される者、カマルッディーン・アブー・ハイル・イブン・ムスリフ・カーザルーニー (Kamāl al-Dīn Abū al-Khayr ibn al-Muṣliḥ al-Kāzarūnī) のもとで、そして真理に至った導師、厳格な先生、シャムスッディーン・ムハンマド・イブン・アフマド・キーシー (Shams al-Dīn Muḥammad ibn Aḥmad al-Kīshī) のもとで、その時代の博士、そして全てにおける全ての師、シャラフッディーン・ザキー・ブーシュカーニー (Sharaf al-Dīn Zakī al-Būshkānī) のもとで、であった。

彼らはこの書物の教授に関して、真髄からその覆いを排除することで有名であり、その難問の解決やその難点の解明に長けていた——神が彼らの土地を潤し、天国を彼らの住処としますように——。しかし、この書物はこの分野について書かれた書物のうち、把握が最も難しく、辿るには最も狭い道であった。というのも、これが精緻な叡智と微細な学問、奇妙な逸話と驚嘆すべき秘密を含んでおり、それらを把握しようとして時代の学徒の頭脳が戸惑い、それらの核心 (aflāk) の解明に彼らの力が到達できないからである。それらは、先の人々のうち最初の者たちの見識の極致であり、後の人々のうち最後の者たちの思考の究極であったために、彼らの誰一人として、この書物の全体で書かれている以上のことを必要な通りに持ち出すことができなかった。

私は彼らに失望した。また、私のもとに届いたいくつかの注釈書についても同様に [失望した]。宗教や信仰における導師 (imām) であり博士であるファフルルミッラ=ワッディーン・ムハンマド・イブン・ウマル・ラーズィー (Fakhr al-Milla wa-l-Dīn Muḥammad ibn ‘Umar al-Rāzī, 1210 年没) ——神が彼に満足し、彼を満足させ、その結末とその住処を良くしてくださいように——の注釈書<sup>(40)</sup> について言えば、彼はその [書物の] 一部を中傷している (jaraḥa) <sup>(41)</sup> のであって、その全体を注釈した (sharaha) のではなかった。厳格で優博な人々、真理に至った賢者たちのうち [ラーズィーの] 足跡を辿った者たちによる注釈書、例えば導師クトゥブッディーン・イブラーヒーム・イブン・ミスリー (Quṭb al-Dīn Ibrāhīm ibn al-Miṣrī, 1221 年没) <sup>(42)</sup>、アフダルッディーン・ムハンマド・イブン・ナーマーワル・イブン・アブドゥルマリク・フーナジー (Afdal al-Dīn

<sup>(39)</sup> この場合、「医者」と訳した「ṭabīb」は特に内科医 (physician) を意味する。

<sup>(40)</sup> GAL<sup>2</sup>, I, 597; GALS, I, 824; Ullmann, 171; IAU, II, 30; Anawati, 204f. (no. 1).

<sup>(41)</sup> ラーズィー注釈の「中傷」(jarḥ) という評価については、R. Wisnovsky, “Towards a Genealogy of Avicennism,” *Oriens* 42 (2014), 323–363 を参照。

<sup>(42)</sup> GALS, I, 824; IAU, II, 30; Anawati, 206 (no. 6). ラーズィーに直接教授を受けている。

Muhammad ibn Nāmāwar ibn ‘Abd al-Malik al-Khūnajī, 1248 年没)<sup>(43)</sup>, ラフィーウッディーン・アブドゥルアズィーズ・イブン・アブドゥルワーヒド・ジーリー (Rafī‘ al-Dīn ‘Abd al-‘Azīz ibn ‘Abd al-Wāhid al-Jīlī, 1244 年没)<sup>(44)</sup>, ナジュムッディーン・アフマド・イブン・アビー・バクル・イブン・ムハンマド・ナフジュワーニー (Najm al-Dīn Ahmad ibn Abī Bakr ibn Muḥammad al-Nakhjuwānī, 1253 年以前に没)<sup>(45)</sup>——神が彼らに慈悲をかけてくださいますように——のものについては、この書物の注釈に関する事柄について、イマーム [ラーズィー] が述べたこと以上には、重要なことを一切付け加えていない。また、ごく些細で、さほど重要でないものを除いて、彼が [既に] 語ったことを語っただけで、彼が語らなかつたことを語らないでいた。それゆえ、私は学問の都の方向、叡智のカアバの方角、つまり高く壮麗で神聖なる居所、純粹で高貴なる上座、哲学者たる先生である援助者 (Naṣīrīya)<sup>(46)</sup>——神が彼の魂を聖別し、その墓を安らかにしてくださいますように——のもとへ向かった。そこで一部の難関は解決したが、一部は残った。というのも、この書物を知るにあたっては叡智の基礎を把握するだけでは充分ではないからである。そのようにする人物は、そのことに加えて魂の医者であり、混質の調整による治療の原則に関する知識と経験を有していなければならない。

それから私はホラーサーンの街へ、そこからアジャムのイラク (‘irāq al-‘ajam)<sup>(47)</sup>へ、そしてアラブのイラク (‘irāq al-‘arab) つまりバグダード方面へ、そこからルーム (=アナトリア) へ旅した。私はこれら大都市の賢者たちやそれら地方の医者たちと議論し、またそれら『医学典範』の難所の真理について彼らに尋ねた。私は彼らの細密さの恩恵を受け、かつて誰のもとにも集まることがなかつた真理が私のもとに集まることとなった。[しかし、] こうした努力の全て、ルームに至るまでの諸都市の遍歴にもかかわらず、この書物について理解できていないことは理解できていることより多かつた。[ついに] 私は [ヒジュラ暦] 681 年 (=ユリウス暦 1282 年) にエジプトの王マンスール・カラーウーン・アルフィー・サーリヒー (Manṣūr Qalāwūn al-Alfī al-Sāliḥī, マムルーク朝第 8 代スルタン, 在位 1279–90 年) ——神が彼に喜びの雨を注ぎ、赦しの外套 (jilbāb) を着せてくださいますように——のもとに至った。

4v その地で私は、[この書物の] 総論に対する完全な注釈書 3 点を手に入れた。1 つ目は、真理に至った哲学者アラーウッディーン・アブー・ハサン・アリー・イブン・アビー・ハズム・クラシー (‘Alā’ al-Dīn Abū al-Ḥasan ‘Alī ibn Abī al-Ḥazm al-Qurashī), イブン・ナフィース (Ibn al-Nafīs) として知られる人物 (1288 年没) によるもの<sup>(48)</sup>, 2 つ目は完璧な医者ヤアクーブ・イブン・イスハーク・サーマッリー・ムタタッビブ (Ya‘qūb ibn Ishāq al-Sāmarrī al-Mutaṭabbib, 1282/83 年没) によるもの<sup>(49)</sup>, 3 つ目は有能な医者アブー・ファラジュ・ヤアクーブ・イブン・イスハーク・ムタタッビブ・マシーヒー (Abū al-Faraj Ya‘qūb ibn Ishāq al-Mutaṭabbib al-Masīḥī), イブン・クッフ

<sup>(43)</sup> *GALS*, I, 824, 838; *IAU*, II, 121; *Anawati*, 206 (no. 8).

<sup>(44)</sup> *IAU*, II, 172.

<sup>(45)</sup> *GALS*, I, 824.

<sup>(46)</sup> ナスィールッディーン・トゥースィー (Naṣīr al-Dīn al-Ṭūsī, 1274 年没) を指す。

<sup>(47)</sup> 現在のイラン西方を指す。

<sup>(48)</sup> *GAL*<sup>2</sup>, I, 597, 649; *GALS*, I, 824, 900; *Ullmann*, 173; *Anawati*, 205 (no. 2).

<sup>(49)</sup> *IAU*, II, 273.

(Ibn al-Quff) として知られる人物 (1286 年没) によるもの<sup>(50)</sup>である。さらに、優れた医者であるナジュムッディーン・イブン・ミンファーフ (Najm al-Dīn ibn al-Minfāh, 1255 年没)<sup>(51)</sup>がこの書物のいくつかの箇所について提起した問題に対するサーマッリーによる回答<sup>(52)</sup>、ヒバトッラー・イブン・ジュマイウ・ヤフーディー・ミスリー (Hibat Allāh ibn Jumay‘ al-Yahūdī al-Miṣrī, 1198 年没) による『医学典範訂正』([*al-Maknūn fī tanqīh al-Qānūn*])<sup>(53)</sup>——彼が著者や、アミーヌッダウラ・イブン・ティルミーズ (Amīn al-Dawla ibn Tilmīdh, 1165 年没) がこの書物に対して書き入れたいくつかの欄外注<sup>(54)</sup>に反論したもの——、また優博な人々による書物、つまり導師アブドゥッラティーフ・イブン・ユースフ・イブン・ムハンマド・バグダーディー (‘Abd al-Laṭīf ibn Yūsuf ibn Muḥammad al-Baghdādī, 1231 年没)<sup>(55)</sup>がイブン・ジュマイウの『医学典範訂正』に反論したもの<sup>(56)</sup>を手に入れた。手に入れたこれらの注釈などを読んでいくと、この書物について残る [理解できなかつた] ことが解決した。難関の箇所や難問はもはや残らず、無駄話も無くなった。

この書物を解説し、そして真髄にとっての覆いに当たるものを排除することに関して、この世界の誰のもとにも集まることがなかつたものが私のもとに集まったので、私はその注釈を書くことを意図した。それによって、言葉からその困難を取り除き、その意味するところの幕を取り去り、しかし言葉を解説し、その意味を解明し、その構造の分解とその構成の訂正による説明に留まることなく、その基礎を確固なものにして、その結び目をほどこき、その意図を解釈し、その利益を増やし、短くされたものを長く伸ばし、謎めいた箇所を解説し、綻びを締め、纏められたものを細分するように努めよう。またこの書物の諸問題に深く関係しているわけではないが [これまでの] 注釈者各々が遭遇したことに回答するための示唆を、あるいは [彼らが遭遇したことのうち] それらの [問題に] 関連することを試験するための [示唆を] 与えるように [努めよう]。これら全てにおいて、不正や出鱈目を避けて公正に行うという条件を意識的に考慮し、[私はこの注釈を書こう]。神のもとに「[全ては] 還り」<sup>(57)</sup>、[神こそ]「怖れるに最も値する」<sup>(58)</sup>。

このように [私がするのは、] この書物の注釈書の多さにもかかわらず、これらの条件を満たしたものを手に入れることができず、これらの規律や規則の一部ですら満たしたものがなかつたからである<sup>(59)</sup>。それら [注釈書は] いずれも、[イブン・スィーナが] その書物で言わず、その分野で語らなかつたことについて、不足しているのである。

[ただし] 私は彼らを非難しようというわけではないし、彼らの誰に対しても悪く思い込んで

<sup>(50)</sup> Ullmann, 176f.; IAU, II, 273.

<sup>(51)</sup> 今回参照した写本の全てで、「MNF’H」ではなく「MFT’H」と読めるが、他の文献録の情報に合わせて読み替える。Ullmann, 308n1; IAU, II, 265f.

<sup>(52)</sup> *Hall shukūk Najm al-Dīn ibn al-Minfāh ‘alā al-Kullīyāt* (IAU, II, 273).

<sup>(53)</sup> *GAL*<sup>2</sup>, I, 598, 643; *GALS*, I, 826; Ullmann, 164f.

<sup>(54)</sup> *Mukhtaṣar al-ḥawāshī ‘alā Kitāb al-Qānūn li-l-Ra‘īs Ibn Sīnā* (IAU, I, 276).

<sup>(55)</sup> Ullmann, 171.

<sup>(56)</sup> *Ta‘aqqub Hawāshī ibn Jumay‘ ‘alā al-Qānūn* (IAU, II, 212), あるいは *Hāshiyā ‘alā taṣrīḥ Sharḥ al-tanqīh* (*GALS*, I, 881) のことか。

<sup>(57)</sup> クルアーン第 96 章第 8 節参照。

<sup>(58)</sup> クルアーン第 9 章第 13 節, 第 39 章第 37 節参照。

<sup>(59)</sup> これ以下数段落, *Mishkāh* 版に翻刻なし。Shūrāzī, *Durrat*, 40.

いるわけでもない。この書の読者が神の保護下に置かれるよう、私は願う。[私は、]それに類するものは既にあるとか、「最初の者は最後の者のために何も残していない」などと言われるように考えたり思ったりすることはない。否、[この注釈書は]我々に先立つ者や我々の同時代の者がしなかったようなかたちで整理されている。それは、分断されたものを統合し、閉ざされたものを開け、放たれたものを引き締め、纏められたものを細分し、短くされたものを長く伸ばし、謎めいた箇所を解説し、問題を確かめ、回答を編纂し、反論を防ぎ、矛盾を除き、一部の[秤皿を]他より重くさせる<sup>(60)</sup>ことによる。もともと、両方の秤皿が均等であれば[別であろうが]。どうして損失から収益が明らかになるだろうか。むしろ真理の目は、矛盾の領域に置き去りにして、囚われてしまった損失として我々がそれを認識してしまわないようにするのである。

5r そしてどうして、最初の者が最後の者へ何も残さないということがあり得ようか。諸学問とこれらの整理は、まさに諸知性の成果であり刷新である。神は最後の者にも、最初の者と同様に知性をお与えになる。学問はある時ある人々のもので、彼らの後にはその王国 (malakūt) への扉が閉ざされ、学者たちへの合流が妨げられてしまう、というようなものではない。知識をお与えになる方は、「明るい地平線上に [あって]、幽玄界を出し惜しまない」<sup>(61)</sup>。

それゆえに言われる。「理性や熱意が等しい場合、あらゆる技術において後の者は先の者より良い」。また言われる。『最初の者は最後の者のために何も残さない』という人々の言葉以上に、学問を害する言葉は無い。というのも、それは学問と学習を阻害して、最後の者を最初の者が先に行ったことに制限してきたからである。これは重大な無知である。というのも、努力する者の全てが、少なかれ多かれ、大きかれ小さかれ、[何かしらの]寄与をするからである。そのため、先の人々が原理の導出やその準備を先んじて達成したように、後の人々も原理 [から] の派生やその発展に従事してきた。また、先の人々が基礎の確立と準備において彼らを後追う者より優れているように、後の人々は彼らに先立つ人々の真理を要約し抽出して判断するのである。

果たして私は、682年 (=1283/84年) に本注釈の執筆を始めた<sup>(62)</sup>。私の才能や能力がなし得る範囲で、私以外の者には困難で欠けていたことをそこに集め、それを隅々まで、単純な注釈、多くの問題と解答をもち、[内容が]豊富で豊潤なものとして、私は書いた。すると、これは遠方に広まり、諸地方で有名になり、探求の手々からの批判を受け、大なり小なりの人々の心から良いものと認められた<sup>(63)</sup>。諸大都市の学者たち、諸地方の医者たちはその[好奇な]首を執拗に私に向けて伸ばし、前述の注釈を[既に]書かれた通りに完成させるよう繰り返し要求してきた。私はそれについて許しを請いたい。彼らが要求してきたのは、私が答える必要があったことだと理解している。なぜなら、その探求は嘘偽り無く、個別的義務 (farḍ al-‘ayn) に当たるからである。彼らは強硬に懇願し要求してきたが、私は必死に弁解し謝罪した。

<sup>(60)</sup> つまり、一部を他より重視し、優先させるということ。

<sup>(61)</sup> クルアーン第81章第23-24節。この箇所はムスリム協会による翻訳を一部変更した。

<sup>(62)</sup> この文章以下、Mishkāh版に翻刻あり。Shīrāzī, *Durrat*, 40.

<sup>(63)</sup> シーラーズィーはこの注釈を何度か改訂したと考えられる。Cf. Walbridge, *The Science of Mystic Lights*, 186; T. Mimura, “Quṭb al-Dīn Shīrāzī’s Medical Work, *al-Tuḥfa al-Sa’dīya* (Commentary on volume 1 of Ibn Sīnā’s *al-Qānūn fī al-Ṭibb*) and its Sources,” *Tarikh-e Elm* 10/2 (2013), 4f.

これは、いくつかの理由による<sup>(64)</sup>。1つには、災厄を被ったことである。つまり厄介な運命が現れて、国々が分断され、危険や逃避が頻繁になり、有益な書物や貴重な草稿が逸失した。これらのことのために、諸地域の遍歴をしながら、道具用具が無いままで、このような書物の執筆は妨げられてしまった。

また、一部の学者たちが土曜日と水曜日には法的判断を下さずに、[それは]金曜日と火曜日の休みが理解力と想像力を弱めるからだと言いつけているということもある。もし1日の休みがこのような[結果になる]ならば、研究したり何かに専念することなく、読書や[他の]些細なことでもなかった20年もの休みについて、貴方はどう思われるだろうか。

また、大量の災害が立て続けに、優博な人々に起こったということもある。そのために信仰の道標は消え去り、聖法の基礎の土台は弱まり、学問とその徒は迫害され、全ての異邦人は寛大に受け入れられることがなくなり、その灯りは消され、その足跡は失われた。

しかしついに、勝利と勝勢を携えて神が来てくださり、強力な力とイスラームの星の現れによって信徒たちを支えてくださることとなった。[神は]ハーカーン、ガーザーンの王国 (al-Dawla al-Khāqāniya al-Ghāzāniya)<sup>(65)</sup>という太陽を人類の上に昇らせてくださった。彼の高き上座は勝利の剣と彼の輝かしい日々で囲まれて、[この]時代における最上のものであり続けている。彼の敵どもの首は彼の足に踏みつけられ、彼に対立する者どもの首は彼の刃<sup>(66)</sup>の鞘であり続ける。そして神は、彼が臣下の状態を良く監督できるように整えてくださり、その領土の諸地域を最優先に考える者を繁栄させてくださり、その[王国の]空の幸福とその栄光の太陽を存続させることによってその王国の基礎を守ってくださるであろう。彼は所有者であり、知者であり、公正であり、優れて完璧であり、高貴の極みへ先んじて至り、高潔で高尚であり、強大な庇護であり、無敵であり、理論と実践と両方の優越点を併せもつ。また彼は、信仰と現世と両方の支配権を有しており、それは状況からではなく本性から、関係からではなく真実からのものである。

5v

[また、]王国と真理と信仰の幸福 (Sa'd al-Dawla wa-l-Ḥaqq wa-l-Dīn)<sup>(67)</sup>、イスラームと信徒たちの援助者であり、諸王と諸支配者の保護者であり、征服する王国の支えであり、輝ける宗派の長であり、誇り高き美德や明白な美質、豊富な善行、潤沢な恩寵、包括的で偉大な恩恵、貴重で美しい繊細さの持ち主であり、その優博さによって広大な海を、その敬虔さと寛大さによって悪行を恥じ入らせる御方、ムハンマド・イブン・サーヒブ・ムウザム・タージュッダウラ=ワッディーン・アリー・サーウィー (Muḥammad ibn al-Ṣāhib al-Mu'zam Tāj al-Dawla wa-l-Dīn 'Alī al-Sāwī)<sup>(68)</sup>が [おられる。]

両名の威光という太陽は輝き照らし続け、両名の幸福の枝は葉が繁り栄え続ける<sup>(69)</sup>。王の陰はそ

<sup>(64)</sup> 以下に言及される出来事には、シーラーズィーの支援者であったシャムスッディーン (Shams al-Dīn) の死去 (1284年) が含まれると考えられる。Cf. Nizai, *Quṭb al-Dīn Shīrāzī*, 65.

<sup>(65)</sup> ガーザーン・ハーン (Ghāzān khān, 在位 1295–1304年) を指す。

<sup>(66)</sup> 写本では「*LḤS'MH*」(al-ḥusāma?)と読めるが、直前の語調 (a'dā'i-hi, aqdāmi-hi, addādi-hi) を考慮して「*aḥsāmi-hi*」(*'HS'MH*)と読み替える。

<sup>(67)</sup> 献呈相手 (サアド……ッディーン [・ムハンマド・サーワジー]) を指す。

<sup>(68)</sup> 写本では「サーウィー」(al-Sāwī)だが、他の記録では「サーワジー」(al-Sāwajī)とされる。

<sup>(69)</sup> この文章以下数行、Mishkāh版に翻刻なし。Shīrāzī, *Durrat*, 41.

の鋭利な決断を伴って広がっていて、学者たちの名声の旗は彼の才覚と威厳に結ばれている。臣下たちは彼の監督によって穏やかになり、災難の目は彼の一瞥によって眠り込む。そして、災害の視線は武器を収め、希望の星々が幸福の地平線から光線を散らすようになろう。彼の美德はあらゆる鼻が熱望するものを超え、彼の才能はあらゆる夢が欲するものを超える。[彼の] 美德は砂の数に匹敵する、つまりそれを数えるための指は賞賛の諸属性の限界を越えている。そのため、それらを賞賛する者は「賞賛の言葉が足りず」それらの中傷する者であるかのようなのである。神は彼をもって、朽ちた道徳を征服者のこの国に広く再生し、イスラームの勝利を認め、学問の指導者と導きの徴のために旗を掲げてくださった<sup>(70)</sup>。神の賞賛によって不幸はなくなり、泉の甘い水のために魂は安らぎ、その時代に太陽が付き添い、学者たちの月と、太陽が昇った。

導師たちと学生たちは未だ数多くの時において無理難題を懇願して私を悩ませ、長い時間をかけて悩ましい機会を設けて私に要求してきた。そのようなことがあり、私は「次の」2つの理由から、先のものより短縮した方法を探ろうと考えた。1つ目「[の理由]」は、私には加筆するほどの情熱が不足しており、むしろ短くして要約しようとする傾向があると考えているからである。2つ目「[の理由]」は、私の著作を不正に習得する者たちがこの注釈に沿って実践するかどうか、私が恐れて見ているからである。もしそれが「[内容の]」豊富なものであれば、彼らは私の注釈を手本にして実践しないであろう。私は思う。賢者たちの思考の抽出物、優博な人々の見識の抜粋であるそれらの偉業や大業は、曖昧さに隠蔽されたことや理解する上で隠微なことがある中で、どうして残り得るだろうか。ある人々の無能さや他の人々の欺瞞があるのだから。

この書物は情熱が足りない者や愚かな医者には役立たない。これを役立てられるのは、思考が完璧で、唯一無二の知能を備えた人々であろう。そうでない人々がそれを所有しても、貴人に対して不誠実な人々から貪られるであろう。「何か仕事をするからには、こういうことを目指すべき」<sup>(71)</sup>である。

こうして、私は先のものより良い方法を探った。いくつかの利益のために、私は注釈と「[原著の]」本文の言葉を混ぜ、しかし原文と付加された「[注釈が]」混同されないように区別した。そこに私は8つの注釈の抜粋を合わせた。それぞれ、イマーム「[ファフルッディーン・ラーズィー]」、ミスリー、フーナジー、ジーリー、ナフジュワーニー、「[イブン・ナフィース・]」クラシー、サーマッリー、マスイーヒー——マスイーヒーと「[単に]」言うときはイブン・クッフであり、先の代「[のマスイーヒー]」を意図するときはアブー・サフル (Abū Sahl [al-Masīhī], 1010年没) と限定する<sup>(72)</sup>——である。またそれら以外のもの、例えば「[イブン・ジュマイウによる]」『医学典範訂正』、それに対する反論、イブン・ミンファーフによる回答<sup>(73)</sup>、『医学典範』への問題に対する偉大な師ナスィール「[ッディーン・トゥースィー]」——神が彼の霊を聖別しますように——による回答、その欄外注、医者王ナジュムルミッラ=ワッディーン・カーティビー・カズウィーニ

6r

<sup>(70)</sup> この文章以下、Mishkāh 版に翻刻あり。ただし、「イスラームの勝利～旗を掲げてくださった」の一文は欠落している。Shīrāzī, *Durrat*, 41.

<sup>(71)</sup> クルアーン第37章第61節。

<sup>(72)</sup> Ullmann, 151.

<sup>(73)</sup> *Kitāb al-Muḥmalāt fī Kitāb al-Kullīyāt* のことか (IAU, II, 266)。

一 (Najm al-Milla wa-l-Dīn al-Kātibī al-Qazwīnī, 1276 年没) ——神が彼に慈悲をかけますように——が問うた『医学典範』への問題について [トゥースィーが] 答えた書簡, また名高い諸大都市や有名な諸地方で優れて規範となる医者たちの手稿の欄外に [我々が] 目にした精緻なことの全体, 名士たる学者たちや哲学者たる賢者たちの口から我々が耳にした精緻なものの全てを集めた——これらは説明するためのもので, 例えとして指示する——。これらが例示されることによって想像をかき立てるだけで, 何も明らかにしないかもしれないが, 目撃したことを書き留めて発言を記録する必要があるためである。

私の足りない思考力と弱い見識によって得られたことの全ては, 彼らが述べたことと比べて優れて大きいのではないとしても, [それらと比べて] 小さく些細なものではない<sup>(74)</sup>。しかし, 私はそうするのみで満足しなかった。さらに私は, 全ての節や章で, その節や章の内容に関して作成された書簡や書物全てからの抜粋を述べた。例えば, 瀉血についてのガレノスやイブン・ティルミーズによる書簡<sup>(75)</sup>を瀉血に関する節で抜粋し, 同様に吸玉, 焼灼, 嘔吐剤, 体毛, 酒, 糞, 尿などに関する書物や書簡を, それぞれに関する章や節で抜粋した。また私は, イブン・ティルミーズが [アブー・バクル・ムハンマド・イブン・ザカリーヤー・] ラーズィー ([Abū Bakr Muḥammad ibn Zakariyyā] al-Rāzī, 925 年没) の『包括の書』 (*al-Ḥāwī*)<sup>(76)</sup>から抜粋したもの<sup>(77)</sup>, イブン・ムトラーン (Ibn Muṭrān, 1191 年没) の『医者 の庭園』 (*Bustān al-aṭibbā'*)<sup>(78)</sup>, 師 [イブン・ムトラーン] の講座で使用されていた医学の箴言集, アブー・ファラジュ・アブドゥッラー・イブン・タイイブ (Abū al-Faraj 'Abd Allāh ibn al-Ṭayyib, 1043 年没) による『「医学問答集」成果』 (*Thimār al-Masā'il al-ṭibbiyya*)<sup>(79)</sup>, 師アブー・ハサン・イブン・ブトラーン (Abū al-Ḥasan ibn Buṭlān, 11 世紀) がその『医者 の饗宴』 (*Da'wat al-aṭibbā'*)<sup>(80)</sup>に書き留めた問題に対する回答, 自然学的な断片や稀有な問題, それらと同類のものを検討した。

私はそれらの稀有なことや精緻なものうち, この書物の問題に結びつけることができるものに力を注いだ。果たして, この書物は奇妙なことの法則, 一連の驚嘆すべきこと, 選び抜かれた秘密の宝庫, 思考の抜粋の鉱脈を有することとなった。それはこの書物が, 我々が述べた書物や書簡全体からの抜粋を, また執筆の時に手元にあった解剖書からの抜粋を取り込んだからである。ガレノスの著作からは 3 点の名著, 『身体器官の用途について』 (*Manāfi' al-a'dā'*)<sup>(81)</sup>, 『解剖手技について』 (*Ilāj al-tashrīh*), 『解剖仕事について』 (*'Amal al-tashrīh*)<sup>(82)</sup>と, いくつかの小

<sup>(74)</sup> この文章以下数段落, Mishkāh 版に翻刻なし。Shīrāzī, *Durrat*, 41.

<sup>(75)</sup> *Al-Maqāla al-Amīniya fī al-faṣd* (*GAL*<sup>2</sup>, I, 642; *GALS*, I, 891; Ullmann, 163f.; IAU, I, 276).

<sup>(76)</sup> *GAL*<sup>2</sup>, I, 268f.; *GALS*, I, 418f.; Ullmann, 129–131.

<sup>(77)</sup> *GAL*<sup>2</sup>, I, 269; IAU, I, 276.

<sup>(78)</sup> *GALS*, I, 892; Ullmann, 165f.; IAU, II, 181.

<sup>(79)</sup> フナイン・イブン・イスハーク (Ḥunayn ibn Ishāq, 873 年没) の著作に対する注釈である。Sezgin, 250; Ullmann, 157; IAU, I, 241.

<sup>(80)</sup> Ullmann, 224f.; IAU, I, 243.

<sup>(81)</sup> Sezgin, 106–108 (no. 40); Ullmann, 41 (no. 15).

<sup>(82)</sup> これら 2 つの書名は通常, 同一の著作『解剖実践について』 (*Περὶ ἀνατομικῶν ἐγχειρήσεων/De anatomicis administrationibus*) のアラビア語訳を指す (Sezgin, 98–100 [no. 21]; Ullmann, 54 [no. 78])。なぜシーラーズィーがこれらを別個の著作として挙げているのか, 現時点では不明である。

著, 例えば『骨の解剖と筋肉の解剖について』(*Fī Tashrīh al-‘izām wa-tashrīh al-‘aḍal*) の書, 解剖に関する 5 篇の書<sup>(83)</sup>, 『[動物] 死骸の解剖について』(*Fī Tashrīh [al-hayawān] al-mayyit*) の小篇<sup>(84)</sup>, 『首の第一頸椎と頭の間関節について, トラシュブーロスへ』(*Ilā Tharāsūbūlūs fī al-maḥṣil bayna al-faḡra al-ūlā min al-raqaba wa-bayna al-ra’s*) の小篇<sup>(85)</sup>, 『身体器官の用途について小版』(*Manāfi‘ al-a‘dā‘ al-ṣaghūr*) の書である。[ガレノス] 以外の書物については, イブン・アビー・サーディク [・ナイサーブリー] (*Ibn Abī Ṣādiq [al-Naysābūrī]*, 1068 年以降に没) による『ガレノス「身体器官の用途について大版」注釈』(*Sharḥ Manāfi‘ al-a‘dā‘ al-kabīr li-Jālīnūs*)<sup>(86)</sup>, アブー・サフル・マシーヒーによる『人間の造りについて』(*Khalq al-insān*)<sup>(87)</sup>, アブー・ファラジュ・アブドゥッラー・イブン・タイブによる『解剖注解』(*Tafsīr al-tashrīh*)<sup>(88)</sup>, またこれら以外の無名な書簡や書物——これらについては必要な時に指示しよう——, 解剖学を含む著名な医学書の全てである<sup>(89)</sup>。

6v 私のこの書物を入手した者は, この分野について我々が数え上げたもの全てを [改めて] 必要とはしないだろう。なぜなら, それが全ての抜粋を, 我々に特に関係することの全体のごとき抜粋を含んでいるからである。[このことは,] 真にこの技術の高みの頂に登り, その競技場での競争を汗して走り, 全ての黒いものがナツメヤシではなく, 全ての赤いものが赤斑ではない<sup>(90)</sup>ことを知っている者には分かるだろう。気性 (*khīm*) が良く, その肌に皮癬が無い者に対して, 私は正直に頼ろう。もしその者が, 私の不注意が余計で余剰な補遺をもって私を取り巻いているのを見つけたときには, 私こそが誤りにとつての犯人であり無能について自白する者である。

宮廷の星の幸福, 首都の天の輝きは, その配慮とその恩寵の目で私を見続け, 高貴さと優博さという特質に要求されることに応じて, また公平と公正の習慣を再生させながら, 彼に対する善行と尊重という優待を私に与えてくださった。それゆえ, 私の努力と活力に従って, 彼への感謝をどのように表し, どのように彼を讃えられるだろうかと私は考えていた——私の表現がそれを表現しきることができないかもしれないが——。また, 繰り返し祝福をもたらす祈願を彼のために行い, 名声を尊重する賞賛を彼のために広めようと考えていた。

私は前述の注釈を, それが彼の名跡と共に長い時代にわたって残るように, 彼の名で作成しようと考えた。なぜならそれは, 宗派や宗教の変化によって変化し, 場所や時間の違いによって違ってくるような知識ではないからである。私は神が与えてくださった知識, 容易にしてくださった理解に取り組み, 配列の中道を行く注釈として書き, 洗練に励む解明として明らかにして, 彼

<sup>(83)</sup> Ullmann, 40 (no. 13). ガレノスによる骨, 筋肉, 神経, 動脈と静脈 (両血管系合わせて 1 冊) の解剖小著全 4 冊は, 古代末期アレクサンドリア以来の伝統で全 5 巻 (両血管系それぞれ 1 巻) から成る 1 点の著作として伝えられた。

<sup>(84)</sup> Sezgin, 100 (no. 22); Ullmann, 53 (no. 74).

<sup>(85)</sup> Sezgin, 136 (no. 142).

<sup>(86)</sup> *GALS*, I, 887; Sezgin, 107 (no. 40, c); IAU, II, 22.

<sup>(87)</sup> *GAL*<sup>2</sup>, I, 274; *GALS*, I, 424; Ullmann, 151; IAU, I, 328.

<sup>(88)</sup> *GALS*, I, 884; Sezgin, 107 (no. 40, b); Ullmann, 157; IAU, I, 241.

<sup>(89)</sup> 「またこれら以外の無名な～」以降序文終わりまで, *Mishkāh* 版に翻刻あり。Shīrāzī, *Durrat*, 41f.

<sup>(90)</sup> アラビア語の諺に, 「全ての黒いものがナツメヤシ (*tamra*) ではなく, 全ての白いものが脂 (*shahma*) ではない」というものがある。

の名を刻みつけ、彼の名跡を留めた。

彼の実直な性格は成熟しており、彼の真っ直ぐな秩序は正常で、とても美しい容貌のうちに現れているため、私はその〔書物を〕もってこの尊い御方に仕えよう。私がその〔書物を〕もって彼のもとに向かい、諸王の中で彼のみを頼るのは、学問やその持ち主たちに対する彼の情熱が強く、学問はその所有者たちの元でのみ栄えるという理由以外にない。彼は、神が支えてくださり、貯蔵されたものをその鋭い理性で認識し、隠匿されたものをその正確な思考で我が物とする。

私が彼の高尚な居所、彼の高潔な上座へそれを献上することで、果実が肥える起因や遊牧の民への雄弁の伝道者のようになればよいのだが。というのも彼は、学者たちがその潮流から掬われる海であり、優博な人々がその光を求める太陽だからである。神が学問の徒から彼の庇護を奪い去ることなく、彼の恩恵と恩寵を無くしてしまいませんように。「アーメン」と唱える者の魂は神が長らえさせてくださる。これは、先駆者たちに共通する祈願である。

それではこの書物、『賢者たちの公園、医者たちの庭園』(*Nuzhat al-ḥukamā' wa-rawḍat al-aṭibbā'*)——彼の名を吉兆、彼の名跡を吉祥として『サアドへの献呈書』(*al-Tuḥfa al-Sa'dīya*) と呼ばれる——の執筆を始めよう。その視線から健康の目が見て、その保護の下で平穩の耳が健勝の叫びを聞く。神がこの〔書物を、〕苦痛という困難から身体を安全にする原因、病気や疾患から混合体を保護する手段としてくださいますように。

神は我々を、その僕たちに対して正しい者たち、その徴を知る者たちの1人としてくださり、この消え去る〔現世〕への依拠という病から治療して下さり、「手を伸ばせば（おいしい）果物が取り放題」<sup>(91)</sup>である楽園の酒を注ぎ、言葉を洗練させ、神が成功裡に完成させて恩寵を与える保護者となってくださるといふ願望を〔実現に〕近づけて達成させてくださる御方である。〔神をこそ〕私は信頼し、懺悔する。

本稿は JSPS 科研費 JP17J01081 による研究成果の一部である。

（日本学術振興会特別研究員／

Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science）

---

<sup>(91)</sup> クルアーン第 69 章第 23 節。